

イザヤ書7章11-14節 「インマヌエルによる救い」

1A 男の子による神の訪れ

1B 女の子孫

2B アブラハムの子孫

3B ダビデの世継ぎ

4B 神の御子

2A 信じない罪

1B 神のしるしへの態度

1C 人に頼る愚

2C 神の介入を拒む頑なさ

2B 希望を信じない心

1C 現状への言い訳

2C 現状変化を拒む罪

3A 闇の中に輝く方

1B 敵の包囲

2B ガリラヤ宣教

1C アッシリア捕囚

2C みことばを受け入れた母

3B 復活の希望

1C 心刺さる預言

2C よみがえり

本文

おはようございます。日本にも定着しているクリスマス、けれどもその意味を知っている人は、とても少ないですね。これはキリストのミナ、つまりキリストを礼拝する日という意味です。生まれてきたイエスを、羊飼いたち、また東方からの賢者たちが、拝みに来たことを思い出し、それでこの方を私たちも礼拝します。今朝は、なぜ、赤ん坊また幼い子どもにしか過ぎないイエスを、私たちが礼拝するのかについて、お話したいと思います。読む箇所は、イザヤ書7章11-14節です。

¹¹「あなたの神、【主】に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。」¹² アハズは言った。「私は求めません。【主】を試みません。」¹³ イザヤは言った。「さあ、聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神までも煩わすのか。¹⁴ それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。

マタイによる福音書によると、イエスが、処女マリアから生まれたことについて、このイザヤの預言が成就するためであったと言っています。その名は、「**インマヌエル**」と言います。その意味は、「**神が私たちとともにおられる**」であります(マタイ 1:23)。そこにいる赤ん坊が、人でありながら、神であるということです。その赤ん坊が神だということです。神が肉体を取って、私たちに間に住んでくださったということでもあります。

私たちは、クリスマスというと、街中の夜のイルミネーションとか、とても良い雰囲気の中で時を過ごすことを意味しているかもしれませんが、けれども、意外にこの時期に、自殺の数が多くなります。そのような華やかな光輝く時間では、そのような気になれない人たちが、孤独をなお一層のことを感じるからです。しかし、今ここに書かれているように、本物のクリスマスは、神が共におられるということ。どんなに独りぼっちに感じて、主は見捨てず、隣におられることを知ることです。

1A 男の子による神の訪れ

1B 女の子孫

このような大きなしるし、処女から、世を救う方が来られることは、太古の昔から語られていました。神は人を造られたその直後に、予め教えておられました。エバが蛇に惑わされて、食べてはいけないと言われた木の実を食べました。そして、それをアダムが食べました。その後、その蛇に対して主が宣言されました。「**創 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。**」蛇の子孫に対して、その脳天を打ち砕くのは、女の子孫だということです。女から生まれる子が、人をめちやくちやにして、滅ぼてきている悪魔を、女から生まれる子が一網打尽にするのです。

2B アブラハムの子孫

聖書は、この女の子孫の約束に沿って、話が進みます。アブラハムという人がいましたが、彼がイスラエル民族の父祖になりました。その彼に対して、彼の子孫が、地上のすべての部族に祝福を与えることを約束なさいました。

3B ダビデの世継ぎ

そして、そのイスラエル民族に、ダビデという人が現れ、彼が王となりました。主は、彼の世継ぎの子が、アブラハムに与えた約束の子孫であり、また、神が蛇に宣言された女の子孫であることを教えるのです。「**Ⅱサム 7:12-13 あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。**」この時から、「**ダビデの子**」と言えば、それはイスラエルを救う方であり、またすべての部族に祝福を与える方であり、人を罪から救う女の子孫なのだということです。

4B 神の御子

先のイザヤの預言、インマヌエルの約束ですが、話を続けて読むと、主は、そのインマヌエル子が、人の子だけではなく、神の子であり、神ご自身であることを教えています。「イザ 9:6-7 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」

「ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。」というのは、女から男の子が生まれることを話しています。けれども次、「ひとりの男の子が私たちに与えられる。」とあります。これは、生まれると書かれていません。ここは日本語が少し語弊を生ませています。言い換えると、「お子が与えられた」ということです。世継ぎの子です。その子は、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」ということです。天地を造られた神ご自身の子であり、この子は、神と一つです。不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれるのです。インマヌエルが、神が私たちとともにいるという意味でありますが、その子自身が、神から直接来られた方で、神なのです。

2A 信じない罪

私が、今の世の中のことを考える時に、悲しいと感じることがあります。それは、希望がないということです。神のしるしというような、今、人間には考えられない、けれども私たちの理解や想像を超えた、大きなことが起こると期待がないことです。

1B 神のしるしへの態度

今さっき読んだ、イザヤによる、インマヌエルの預言の背景をご説明します。時は、紀元前八世紀のことです。イスラエルの王国は二つに分裂していました。北イスラエル王国と南ユダ王国です。ユダには、アハズという人が王でした。彼は、イスラエルの神には関わりたくないと思っていた人でした。他の外国の神々に思いを寄せていました。

そんな中、北イスラエルの王がユダの国を攻め入ろうともくろみます。北イスラエルの隣国アラムと共謀して、攻め入ろうとしたのです。その知らせを受けたら、アハズ王は、「林の木々が風に揺らぐように揺らいだ。(7:2)」とあります。しかし、イザヤはそんなことはないと否定します。主なる神が、二人の王の企みを無きものにして、彼らを裁くことを教えられました。それで 11 節で、「あなたの神、【主】に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。」と言われているのです。主とは関わりを持ちたくとも、このことが確かであることを知らせたい、だからしるしを求めなさいと鼓舞しておられるのです。ところが、「私は求めません。【主】を試みません。」と言って断るのです。

そこでイザヤは、「さあ、聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神

までも煩わすのか。」と言っています。自分を越えた神、自分に関わろうとされている神に、自分の人生には入り込んでほしくないアハズが起こっているのです。だから、しるしは求めませんと断っているのです。それに対して、ダビデの家は、人々を煩わせているだけでなく、神ご自身も煩わせると嘆いています。親切に、愛をもって、仲間が「いいから信じて見なよ。このことを試してみるがいい」と言ったとして、「いやだ」と断ったら、煩わせていることになりますね。それを神に対しても、行っていますよ、ということです。この世において、神がおられるのだったら、だったら、この方が何をするのかを見てみよう、と、取り組む人々が少ないのは、とても悲しいことです。

1C 人に頼る愚

神が自分の人生や生活に関わってくださることに、一度、希望を置いてみるのが、なぜ、そんなに嫌なことなのでしょう？神なんて、いなくても構わないのであれば、自分自身がどこまで頼りになるのでしょうか？「私は、どんな人にも頼りませんよ。どんな立場も取らないことが、私のやり方です。」という人は、「どんな立場も取らない、という立場を強く取っている」ということに、気づいていません。

アハズ王は、この後で取った行動が驚くべきものでした。北イスラエルとアラム、南ユダ、その周辺の国々は敵同士ではありましたが、みなが一つの大きな脅威を感じていました。それは、超大国アッシリアです。今のイラクにあった大きな強国です。そこがどんどん、周辺の地域を侵略して行っています。それで、北イスラエルとアラムは、南ユダも強制的に自分たちと連合させて、アッシリアに対抗しようと画策していたのです。

そこでアハズは、事もあろうに、そのアッシリアに助けを呼ぶのです。これは、中学生の悪ガキたちが喧嘩しているところに、大人のヤクザがやってくるようなもので、アハズは、そのヤクザ、アッシリアに助けを呼びました。それで、アッシリアはアラムの都ダマスコを倒し、北イスラエルのサムリアも倒しました。それで安心と思いきや、アッシリアがそれで終わらせないことはあまりにも明白です。それで、ユダの町々にまで侵入して、最後はエルサレムを取り囲むだけとなりました。

神なんかに頼ることはできないということは、自分自身は他のものにより頼んでいるのです。私が、大学生でクリスチャンになったばかりの時に、学生友だちが、私が宗教に入ったので、可哀そうだ、哀れだという感じで話していました。その直後に、彼自身が自分が今、通っているセミナーの話をしました。よく聞くと、どんどんお金を巻き上げる、自己啓発セミナーで、まがいものだったのです。教会では、献金はありますが、あくまでも自発的なもので、騙しや強制はありません。哀れだと見下げていた人が、むしろ哀れになっている、ということが多々あるのです。

2C 神の介入を拒む頑なさ

イザヤの預言が、アハズ個人というよりも、「**ダビデの家**」となっていることに注目してください。ア

ハズの態度は、後のユダヤ人指導者たちの態度に相通じるものだからです。イエスは、エルサレムの中に入られる時に、その後、エルサレムがどうなるのかを予め見て、泣かれました。「ルカ 19:44 そしておまえと、中におまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ。」イエスが地上におられた時から 40 年後、紀元前 70 年に、このことが起こりました。ローマがエルサレムを包囲し、神殿も何もかも、破壊してしまったのです。そして、その理由を、「神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ」しているからです。

神が、人々の中に介入してくださっていました。キリストが、神の子が人間の世界に来られていたのです。イエスは、数々のしるしを行っていました。それを最もよく知っているはずなのが、ユダヤ人の宗教指導者です。預言に書かれていることを、ことごとく行っていたのですから。イエスが生まれて間もなくして、東方から賢者たちがやってきました。ヘロデ王が、聖書の学者らに尋ねると、キリストは、ミカという人の預言にしたがい、ベツレヘムから来ることを知らせていました。彼らは、神の訪れの日なのだと思えるべきです。けれども、その知識だけ王に伝えて、自分たちは何の反応もしなかったのです。

イエスは数々のしるしを行われたのですが、それでも拒んでいました。それで、こんなやりとりがあります。「マタ 16:1-4 パリサイ人たちやサドカイ人たちが、イエスを試そうと近づいて来て、天からのしるしを見せてほしいと求めた。2 イエスは彼らに答えられた。「夕方になると、あなたがたは『夕焼けだから晴れる』と言い、朝には『朝焼けでどんよりしているから、今日は荒れ模様だ』と言います。空模様を見分けることを知っていながら、時のしるしを見分けることはできないのですか。悪い、姦淫の時代はしるしを求めます。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」こうしてイエスは彼らを残して去って行かれた。」イエスが、地上でしるしを行っていたけれども、天からのしるしを見せなさいと要求したのです。それは、「天からのしるしを見たら、信じますよ」ということではありません。そもそも、信じる気がないのです。それで、主は、しるしは与えられないと断言されました。残るはヨナのしるし、これは死んでよみがえるしるしです。イエスは、私たちの罪のために十字架で死なれましたが、三日目によみがえられました。

主は、私たちに希望を与えたいと願われています。それで、いろいろな形でしるしを与えておられます。そして聖書によって、そこに希望があるかを教えてください。そのことに気づき、そしてこの方に期待するのです。

2B 希望を信じない心

1C 現状への言い訳

私たちは、希望が与えられようとしても、それを受け取らない時があります。38 年間、足が動かなかった人がいましたが、イエスが近づいて、「良くなりたいか」と聞かれました。病人は、「ヨハ 5:7

主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りていきます。」良くなりたいか？と尋ねられたのですから、「はい、良くなりたいです」と言えばよかったのです。それが、子どものような素直な回答ですね？ところが、良くなれない理由を話しました。私たちは、そうやって希望から自らを引き離すことが多いです。そのまま、希望していることを語ればよいのですが、いろいろな理屈を言うってしまうのです。

2C 現状変化を拒む罪

そして、今、このままの状態であることを願います。これは、私たちにとっての挑戦ですね。自由になりたいと思っても、あまりにも縛られている期間が長いと、自由の 때가 やってきても、自ら縛られることを選んでしまうということがあります。

3A 闇の中に輝く方

しかし、やはり、クリスマスのメッセージというのは、それでも、「あなたには救いがあります。それは、人からではなく、今までに聞いたこともない、見たこともない、神からの救いです。」ということですよ。人であれば、失望してしまうでしょう。けれども、神は決して失望に終わらせません。それは、聖書に膨大に書かれている、希望を抱いた人々によっても証明されているし、今、生きている、イエスを信じている人々によっても証明されています。

1B 敵の包囲

イザヤの、インマヌエルの預言は、キリストが来られる預言ですが、しかし、その前にも、神がともにおられることを、ユダ王国が経験することになります。アッシリアがユダの町々を攻め入って、それがまるで洪水のようなもので、どんどん流れ入ってきます。けれども、救いがあります。「8:8 ユダに勢いよく流れ込み、あふれみなぎって首にまで達する。その広げた翼は、インマヌエルよ、あなたの地をおおい尽くす。」アハズの子ヒゼキヤが王となりました。彼は神を信じました。しかし、アッシリアは攻めに攻めてきます。この預言のとおりです。エルサレムが包囲された時、彼は打ちひしがれて、「赤ん坊が産道を通っているのに、出てこないのです。」と言い表して、その苦しみをイザヤに話しました。そうすると、主はアッシリアを必ず滅ぼすことを約束されたのです。それで、なんと、十八万五千人のアッシリア兵が一夜にして滅ぼされたのです。

このようにして、自分は闇の中にいることが多くあります。自分自身の人生や生活で、どうやってもうまいか、むしろ悪い方向に進んでいるというようなとき、どうか、主の前に出て来てください。主は、闇の中で光として輝きます。

2B ガリラヤ宣教

1C アッシリア捕囚

イザヤの預言は、再び、その時から七百年後に飛びます。「イザ 9:1-2 しかし、苦しみのあつた

ところに闇がなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝く。」ガリラヤは、北イスラエル王国の一部でした。そこにアッシリアが攻め入り、アッシリアの一部になりました。その後は、バビロン、ペルシア、ギリシア、そしてローマと、ずっと異邦人の過酷な支配の中がありました。しかし、その苦しみがあったところに、闇がなくなると言われているのです。大きな光を見るという希望が与えられました。

2C みことばを受け入れた母

そのガリラヤの小さな村ナザレに、ヨセフと、いいなずけのマリアがいました。マリアのところに、ガブリエルという天使が来ました。ちなみにヨセフは、ダビデ家の末裔です。それで、イザヤにかつて与えたことばを、今、あなたのうちに実現することをガブリエルが伝えるのです。「ルカ 1:30-33 恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。31 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。32 その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」マリアは、まだ自分は男の人を知らないと言いましたが、ガブリエルは続けます。「1:35 聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

すべては、イザヤの預言のとおりです。そこで大事なことばを、マリアが発します。「1:38 ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」アハズ王と比べてください。人知を超えた、神のしるしです。それを彼女は、自分自身は主のはしためであると言っています。そして、おことばどおり、この身になりますようにと言っています。

3B 復活の希望

これが、希望を自分の身に受ける態度です。イエスが、罪から私たちを救う、救い主です。この方に、まことのいのち、永遠のいのちがあります。これは、現状の中で生きている大半の私たちには、勇気の要る決断です。主イエスの言われることを、自分の生活や人生に関わることを、信じ、受け入れるのです。しかし、その時から希望が始まります。生きた希望が始まります。

1C 心刺さる預言

マリアが、主のことばを受け入れましたが、それで問題がなくなるわけではありません。希望が大きいためこそ、その過程では心が刺さるような苦痛も通ります。シメオンという預言者が、エルサレムにいました。ヨセフとマリアが、赤ん坊のイエスを神殿に連れてきた時に、彼は祝福しました。今、自分の目で神の御救いを見たと言いました。そして、母マリアにこう告げます。「ルカ 2:34-35 ご覧ください。この子は、イスラエルの多くの人々が倒れたり立ち上がったりにするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことに

なります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

それもそのはず、キリストは十字架につけられます。そこに至るまで、人々の心が露わにされません。正しい人と思われていた人々が、いかに罪深いかが露わになります。主は光として来られたので、人々の闇が明らかにされるからです。自分はそこそこ正しいと思っている人は、まだキリストの十字架を見ていない人です。十字架への道は、人がいかに罪深いかを示す道程であるのです。そこで、自分が罪人であることを認め、そこから神に立ち返る時、新たに生きる希望を得ます。

2C よみがえり

マリアは、十字架につけられたイエスを見なければいけません。しかし、主は三日目によみがえられました！そして、天に昇られました。使徒の働き 1 章には、弟子たちが一つになって祈っていた時に、そこにマリアがいることを書き記しています。「1:14 彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。」弟子たちが、イエスの家族と共に、祈っていました。マリアにとって、イエスはもはや、自分の息子ではありません。この方は神の子であり、自分自身の主です。

このようにして、クリスマスは、神の奇跡、神のしるしを自分の人生にお迎えする時です。アハズのように、主を試さない、主にかかわらないということではなく、どうかマリアのように、神のことばが自分自身に実現するように祈ってください。この方を、自分の罪から救う方であることを信じ、受け入れてください。そうすれば、どんなに失望しても、失望で終わることなく、主は必ず希望で満たしてくださいます。